



国際交流基金

<http://www.jpf.go.jp/>



11. Mostra
Internazionale
di Architettura

PRESS RELEASE

July 25, 2008, No.351

第11回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展2008

日本館展示のタイトルと展示内容が、以下のとおり決定しました。

EXTREME NATURE: Landscape of Ambiguous Spaces

コミッショナー

五十嵐太郎（建築批評家／東北大学准教授）

参加作家

石上純也（建築家）／大場秀章（植物学者）

国際建築展 全体概要

総合テーマ：Out There. Architecture Beyond Building

総合ディレクター：Aaron Betsky

（シンシナティ美術館館長／オランダ建築協会（NAI）前ディレクター）

開催場所：ジャルディーニ地区（Giardini di Castello）

アルセナーレ地区（Arsenale）など

一般公開会期：2008年9月14日（日）～11月23日（日）

10時～18時開場（期間中無休）

内覧会：2008年9月11日（木）～9月13日（土）

10時～19時

授賞式：2008年9月13日（土）17時00分

公式 Web サイト：<http://www.labiennale.org>

日本館 展示概要

主催：国際交流基金（ジャパンファウンデーション）

助成・協賛：財団法人大林都市研究振興財団、株式会社 資生堂

協力：財団法人ユニオン造形文化財団、ギャラリー小柳

公式 Web サイト：<http://www.jpf.go.jp/venezia-biennale/arc/>

公式カタログ

現代建築家コンセプト・シリーズ2：石上純也作品集（仮）

日・英 A5版 148頁 2008年9月刊行予定、税込1,890円

INAX 出版 <http://www.inax.co.jp/publish/> ISBN978-4-87275-150-5 C0352

報道用写真・その他お問い合わせ

国際交流基金（ジャパンファウンデーション）芸術交流部 造形美術課 担当：竹下

電話：03-5369-6062、電子メール：japanpavilion2008@jpf.go.jp

「地球を、開けよう。」

情報センター

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-4-1

Tel:03-5369-6075 Fax:03-5369-6044



国際交流基金

<http://www.jpf.go.jp/>



11. Mostra
Internazionale
di Architettura

日本館のまわりに、石上純也が小さな温室群を設計する。

1974年生まれの上は、SANAA 出身のもっとも注目される日本の若手建築家である。長さ 9.5m × 厚さ 3mm の「テーブル」(2005)、高さ 14m 重さ 1 トンの「四角いふうせん」(2007)、星空のように 305 本の柱がランダムに並ぶ神奈川工科大学 KAIT 工房(2008)など、極端でありながら、それが当たり前のように存在する「建築」を手がけ、美術やデザイン界も驚かせてきた。彼は、SANAA 的なデザインをさらに突き抜け、現代日本の建築の最前線に位置している。

通常、建築の展示会は実物を置くことができない。代理物としての模型、映像、ドローイングを使う。インスタレーションも既存の構築物に寄生するものだ。しかし、日本館では、緻密な構造計算によって初めて成立する、ぎりぎりの 1/1 の「建築」そのものによって新しい可能性を示す。これは、建築とは何か、という根本的な問いにもなるはずだ。極端な性質をもつ華奢な温室は、モノとしての存在感が薄くなることで、まわりの環境に溶け込む。構造設計は、佐藤淳が担当する。

前回のヴェネチア・ビエンナーレでは、各国が過去の建築を振り返る傾向にあったが、こうした国際展は博物館のような場ではなく、次世代の建築を紹介するアリーナであるべきではないか。そもそも博覧会とは、エッフェル塔やバルセロナ・パヴィリオンが出現したように、1851 年の第 1 回ロンドン万博以降、新しい実験的な仮設構築物をつくり、建築の歴史を更新するチャレンジの舞台だった。

日本館は、世紀末の雰囲気とともに、震災、少女都市、オタクなど、さまざまなかたちで建築の終わりを突きつけ、話題を集めてきた。しかし、新しい世紀を迎えたいま、日本館は改めて、建築の始まりを見せるべきではないか。最初の万博会場、クリスタル・パレスは、温室の技術を参照した建築だった。とすれば、日本館の展示は、博覧会の起源にたちかえりつつ、新しい建築の始まりを提示するものとなるだろう。

しかし、石上の温室は、空調設備や強固な境界がなく、完全な人工環境ではない。内部と外部が曖昧に混ざりあうような弱い境界をもつ。そして植物学者の大場秀章の協力を得て、公園の風景にかすかなゆらぎを与える多様な植生をめざす。一見、何気ない風景に見えるかもしれない。だが、これこそが、われわれの考える最先端の自然環境である。

日本館の内部はほぼ空っぽとなり、本来の美しい空間があらわになる。一方、まわりでは温室を点在させることで、外部空間をインテリア・ランドスケープのように構成していく。だが、オブジェとしての建築の反転がヴォイドとしての外部空間を生むのではない。建築のファサードが外部を規定するのでもない。エーテルの充満したかのような透明なヴォリュームの温室の内部空間が、外部空間を意識させる。だが、そこには家具が置かれ、室内のようでもある。日本館そのものも、「建築」というよりは、人工的な地形、あるいは「環境」の要素のひとつとしての見立てを行う。もともとの屋外空間と、ガラスに包まれた華奢な鉄骨の構造体のあいだに生まれる空間も重なりあう。二重化された曖昧な風景がたちあらわれる。それは内外の植物、家具、建築、地形、環境など、あらゆるものが同時に存在していることを認識する空間の状態を生むだろう。

コミッショナー： 五十嵐太郎

「地球を、開けよう。」

情報センター

〒160-0004 東京都新宿区四谷 4-4-1

Tel:03-5369-6075 Fax:03-5369-6044